研究ノート

留学生の増加とコミュニケーション対応
安達ゼミの10年間の実績

安　達　清　治

は　じ　め　に

政府の留学生10万人政策が開始されてから国際化という波があり、大阪観光大学でも留学生が目立つようになった。(現在は30万人計画である)。留学生のベスト3ではトップが中国で、次に韓国、台湾である。他に、タイ、マレーシア、インドネシア、ミャンマー、ネパール、そしてロシアなどからである。ベスト3は現在の日本の全体の外国人数のベスト3と同じ実績である。

しかも日本の現状は、少子高齢化時代となっており、入学生は、日本人より留学生が目立つようになってきた。大阪観光大学も留学生がここ数年で急激に増加している。中国からは、留学生のトップランクが続いているが、最近は中国以外のアジアからの留学生も増えている。ロシアからは平成22年に留学生が編入生として入学している。今日、これら留学生での比率が50パーセントを越しているのである。

大阪観光大学の創設以来（開学時は大阪明浄大学でその後名称を変更した)、演習（ゼミ）を受け持ってきた。そして10年間を持って2012年3月に私も退職をすることになった。すでに大学は留学生比率が50パーセントを突破したこと、さらに増加することは明らかであり、留学生対策が教育にとって重要な課題と思われるため、まとめたものである。

そこで、私のゼミも開校時は日本人のみであったが予想もしないほど毎年留学生が増加し、今年度は50パーセントになっている。このため留学生の持つ問題、留学生と日本人学生との良好なコミュニケーションを維持することの問題が生じており、今後解決しなくてはならない重要な問題となっている。

留学生の持つ問題で目立つのは、とくに日本語能力の低下問題、経済的な欠如の問題が表面化していることである。経済的な問題ではほとんどの学生が資格外活動によるアルバイトの日常化がある。結果、授業では居眠りする学生が目立っている。

コミニュケーションの欠如では、大学で日本語の1級取得者、2級取得者などの取得者が少なく、中国で取得した日本語1級者が決して実力があるわけでないものが目立つ。この結果、プレゼンテーション15分の発表がほんの2–3分となり、レポートがほとんどかけない学生が目立つ。このため、日本人学生とのコミュニケーションがスムーズにならないことにもなる。

こうした問題は、他の手段（留学生別科制度や全寮制、日本語対策の強化など）で解決すると思うが、すでに他大学（別科制度でカリキュラムも違う）が開設して対応しているものの当面の解決策としているものの、現状での私なりにどう解決していくかが毎年の私の課題として対応したことである。

大学での目標は、私は三つのテーマを出している。卒業までに　一、資格を取得する。(留学生は日本語1級）二、友人を作る、三、旅行をする。しかし日本人学生でも資格を取得せず、友人も無くいつも一人で大学に来ている学生もいる。

留学生も様々

留学生と言えば、優雅な‘遊学’者という印象を持っていた。さらに、実力があり、日本語も堪能の学生ばかり、という先入観であった。

確かに国家試験（旅行業務取扱管理者）を取得する学生（中国からの留学生）も大学から2人いたし、わがゼミで中国（上海の学生）からの学生はアルバイトをしたことがない、という学生もいる。(しかし残りのゼミ

の 14 人は何らかのアルバイトはしている)、TOEIC 800 点の学生（韓国の留学生）もいる。すべての留学生が劣等性ではない。

途中で退学したゼミ生の学生は留学生を含めて 3 人いる。

日本人学生では、1 人が（地方からの出身の学生）自閉症となり 1 年間休養した後に退学した。もう 1 人（東京出身）は父親の経済的理由で学費が賄えないため、3 年で退学した。留学生ではゼミの女子留学生が、入管からの強制退去となって結果的に退学となっている。経済的に許容量の範囲を超えた違法なアルバイトによって、退学となっている学生もいる。

経済的な理由で退学する学生は、日本人学生も父兄の経済的な破たんで学校をやめているが大阪在住者もいる。しかも地方からの学生の場合は当然奨学金を借りているものの、卒業後に返済が苦しいことになるからとして三年で退学している現実である。

退学者では、病気のほかに進路変更による退学者もいるが、大学全体では経済的な理由で退学するものが目立ってきている。

研究生では、これまでほとんどが 1 年間の研究生を終了して帰国しているが、私のメモでは日本人と結婚した者 2 人。在学中に自国人と結婚した者 1 人。日本で就職した者 3 人、大学院に進学した者 1 人である。

日本人と結婚した留学生では、1 人はインドネシアからの女子留学生。日本人女性と結婚した中国からの留学生は上海でパン屋を開いているという。女性はちなみにパテシエ資格者という。在学中に自国人と結婚した中国人は日本で就職している。

大学院に進学した内モンゴルからの男子留学生は、修士学生として大学院に進学し、さらに博士コースに進学したと報告している。ちなみに研究課題は、「記紀の歌謡の研究」である。

就職状況では、ゼミの 1 期生では HIS の香港支店勤務（日本人女子)、加賀屋営業部勤務（日本人男子)、読売旅行・長崎国際課勤務（日本人男子）が観光関係勤務、2 期以降では、台湾旅行会社勤務（台湾人女子)、農協関係 3 人、インドネシアホテル勤務（インドネシア女子)、都ホテル営業勤務（日本人男子）が実績となっている。観光関係以外ではサービス業が多い。

23 年度ゼミ生の実態

23 年度のゼミ学生は 16 人で、このうち留学生は 8 人であり留学生比率は 50 パーセントになる。ゼミの留学生比率は年々増加しているのが現状で、中国人学生が主流を占めている。現在のゼミでは 16 人中で韓国の留学生は 1 人、中国の留学生が 7 人で、合計 8 人である。※調査資料参照。(研究生含む)

このため留学生と日本人のコミュニケーションが重要となっているが、留学生の急増もあってコミュニケーションを容易にすることは年々難しくなっている。コミュニケーションを活発化するための手段としては、①全員との懇親会の開催 1 回（学校負担で無料)。②2 人ずつの懇親会（当方が負担で無料)。③卒業旅行の開催。(近くにある犬鳴山温泉に 1 泊旅行、会費制で一人 1 万円)。④インストラクターによる美容講座。④旅行博覧会＝東京の参加（2 泊 3 日)。⑤ゼミでのテーマを決めたプレゼンテーションの実施。・・などを行ってきた。

そのほか、山中渓の桜の花見会の開催、よさこい祭りの見学、すしパーテーの開催も当方主催で実施した。‘プレゼンテーションでは故郷を語る’をテーマにしての発表を一人一人行い、質疑応答をしている。(しかし日本人から中国人留学生、中国から日本人への質問はほとんど出ない。韓国人留学生も同様である)

このためには、まとめのレポートとの提出と、一人 15 分のプレゼンテーションを行った。これらのスケジュールで前期が終わる。

その他では、海外実習はオーストラリア旅行（参加費は一人 15 万円)、米国西海岸旅行（参加費は一人 18 万円）を毎年実施している。参加学生は留学生との混成であり、いずれも単位が取得できる。留学生の参加はちなみに米国西海岸で 4 人であった。私と辻先生が指導している。さらに、私の研究室は 24 時間オープンとしており、相談に対応している。相談の内容は、資格、就活がほとんどであるものの、話がしたくて訪れる学生は、日本人だけでなく留学生も多い。

しかしながら、アルバイトの日程がゼミの日程と一致せず、プレゼンテーションも遅れが目立ち（欠席するため)、ゼミの懇親会も参加は平均 70 パーセントである。しかも 4 年生の後期は就活が山場となり、ゼミも休みがちとなる。

このまま留学生が増えていくと、日本語能力が不足している留学生が多いため入学後の日本語対策は重要である。(中国で取得した学生の日本語のランクはあてにならない。私のゼミでは、中国で 1 級という学生がプレゼンテーションの発表がたどたどしい日本語であり、返答するのも同様だからなのである。)

今後、日本語講座（実力に応じてのクラス分けや、場合によっては中国人先生のクラス、日本語講座を現在の倍の時間の設定など）を強化するか、日本語別科を作るかの方法が必要に迫られるのではないか。

こうした対策がないと学生の出席率が低下する（厳しい先生の科目は受講せず、あるいは出欠を緩めると出席率は極端に減る。受講生が 1 人になっている科目もある）。結果的に実力が低下し、機能が壊滅することもにもなりかねない。

留学生の日本への質問

留学生から日本の社会と政治に対して質問があり、改めて日本、韓国と中国について知ることになる。

●なぜ大阪にはこんなにホームレスの人がいるのか。存在するとは想像していなかったという。留学生の彼女はちなみに JR の新今宮駅近くにに住んでいる。

返答――会社のリストラによって失業した人。家庭の不和（夫婦の問題）で家を出た人がホームレス社を生じている。東京には山谷地区に同様の人が集中している。「日本地下経済白書」（祥伝社）では、日本のホームレスは大阪がトップで 6,603 人、東京 5,927 人、名古屋市 1,788 人、その他を加え 2 万 5,000 人前後で推移しているという。

●なぜ中国人学生にクレジットカードを発行してくれないのか。

彼女は日本のクレジット会社に三社も申請したが却下されたという。保証人もあるのになぜですか。

返答――保証人の問題ではないか、と答えた。米国に実習に参加した 3 人の中国人学生は、US ドルの札束を持っての旅行となっている。

●なぜ日本は原発のニュースを毎日流すのか。心配になる。

中国では中国の原発事故のニュースはほとんど発表されないという。発表されないのも心配となるが日本の報道では頻繁の発表も心配になる。いずれの国でも心配であり、的確にならないのか。

返答――今回の東日本大震災（津波と、原発事故）でゼミの中国人学生が 2 人帰国した。中国での日本への自粛情報と家庭からの帰国要請があったからという。しかし電話で日本のうち大阪の影響はほとんどなく安全である。しかも来年卒業であり、日本に帰国して卒業単位を取得すべきである、と説得した。結果 2 人とも大学に復帰している。しかし全体では日本から 20 パーセント近くが帰国し、復帰してない。（私の授業の旅行業法では 107 人中 15 人が帰国している、他の科目も同様。）池袋の日語学院でも同様に 20 パーセント近くの学生が帰国したという。

今回の 3・11 以降は日本にとって大きな影響下にあることは事実であり、留学生にも大きなショックとなっていると感じている。

●なぜ日本人は、首相（管氏＝23 年 6 月時点）をマスコミが日常的に批判し、止めるべきだ、失格だという。あまりにも失礼ではないのか。中国で首相を批判すれば、首が飛びます。という。

返答――日本は民主主義であり、世論主義であり、しかも任期制の首相ではないため、スキャンダルを起こせば当然のことながら、そのほかにも人気が低落すると、マスコミの退陣の声が強まる。

●日本で良かった点と良くなかった点

良かった点　①電車の発着時刻の正確さはびっくりもし、感心した。②和食（とくに刺身類）は食べられることがすごいと思った。（日本にくるまで食べたことが無い）③日本の四季（とくに桜と紅葉）はすばらしく美しい。

良くなかった点　①交通費は大変高いと思う。②家賃も高いのにへいこうしている。

返答――電車の正確さはわれわれは気がついていない。交通費は確かに高いと思う。正確さやサービスが加わっているからと返答した。

参考文献

①新版「在日外国人」田中　宏著　岩波新書（2008 年度発行・第 23 版）
②「中国・台湾・香港」中嶋嶺雄著　PHP 新書
③「中華人民共和国」国分良成著　ちくま新書
④「大学時代しなければならない 50 のこと」中谷彰宏　PHP 文庫
⑤「大学淘汰の時代」喜多村和之著　中公新書
⑥「国際観光白書」日本政府観光局　（財）国際観光サービスセンター
⑦「観光ビジネス未来白書」加藤弘治編著　同友館（2010 年版）

在留資格別の外国人登録者数（1994 年末現在、単位・人）

留学生数	60,110 人	
内・中国・台湾		34,423 人
韓国・朝鮮		13,930 人
就学生数	44,418 人	
内・中国・台湾		33,317 人
韓国・朝鮮		5,701 人

※「国際人流」1994 年版

平成 23 年度演習（ゼミ）学生のデータ

23 年度ゼミ学生

●ゼミ学生の人数及び国籍

日本人……8 人（うち女子 2 人）
韓国人……1 人（　　女子 1 人）
中国人……7 人（　　女子 2 人）
※ただし研究生 3 人を含む。
計　16 人

●現住所

大学周辺（泉佐野市）……2 人
和歌山県……1 人
神戸市……1 人
大阪市内……12 人

●資格等

総合旅行業務取扱管理者……1 人
日本語資格者 1 級……3 人
温泉実践士……1 人

●就活（平成 23 年 7 月現在）

日本人……8 人（日本で就活希望）
韓国人……1 人（韓国で就活希望）
中国人……7 人（中国で就活希望）

●バイト（資格外活動届者と日本人）

あり……15 人
全くなし……2 人

●進学等

研究生（希望）……1 人。
大学院（希望）……今期の希望はなし
専門学校……1 人。（日本人学生）
注）ゼミ生のうち日本人留年生（7 年）1 人含む。

安達ゼミ生の 10 年間の記録

入学年度	人数	（内・留学生数）	（備考）
平成 14 年	15 人	（0 人）	
15 年	11 人	（5 人＝台湾）	
16 年	15 人	（5 人＝中国）	
17 年	10 人	（3 人＝中国）	
18 年	14 人	（2 人＝中国、2 人＝インドネシア）	
19 年	9 人	（7 人＝中国）	
20 年	13 人	（5 人＝中国）	
21 年	15 人	（4 人＝中国）	
22 年	12 人	（4 人＝中国、1 人＝韓国）	
23 年			

合計　115 人（教務課調べである）
※22 年に 8 年生が 1 人いる。
※22 年に留学生 4 人が研究生となっている。
※退学者は 2 人で 2 人とも日本人である。

山中渓の花見会（男を除き全員中国留学生）

平成 22 年の歓迎会（サイゼリアにて）